

辻邦生のパリ滞在(4)

—1958年夏—

Le séjour de Kunio Tsuji à Paris

佐々木 逕*

SASAKI Thoru

5 1958年夏

5-1 革命記念日をあとにして

パリに住みなれ、小説論のために苦しんでいた辻邦生が、パリを離れたのは1958年(昭和33)7月19日の夕方、リヨン駅発19時の列車に乗ったときであった。それまでのパリ滞在は279日になる。佐保子夫人は研修のためにすでにポワチエに向けて7月11日にパリを離れている。この旅立ちの前に、革命記念日の様子を見ているのだが、初めてのことである。このときの様子を次に引用しておく。なお、原文はフランス語であることを付け加えておすが、出版された『パリの手記』では日本語に翻訳されてカタカナで表記されている。

今日ハ九時ニ起キ、スグジャンゼリゼーニ軍隊ノ行進ヲ見ニ出カケタ。軍歌ガ聞エ、大勢ノ人々ガ熱狂シテイタ。頭越シニ軍隊ノ行進ガ見エルヨウニ潜望鏡ノヨウナエリスコープヲ買ッテイタ。ドコモカシコモエリスコープノ林立デアッタ。中ニハ、ド・ゴール將軍ノ写真ヲ売ッテイル老人ナドモイル。コレハ自由ノフランスカ、ト、僕ハ自問シタ。オソラクド・ゴール政権ヲファシズムノ予兆ト見ル人ガイルノモ事実ダロウ。ソレカラコントレスカルプ広場、バスチーユ広場、レピュブリック広場、シャトレ、市役所前、へ出カケタ。シャトレデハ勲章ヲ胸ニサゲタ男タチガ三色旗ヲカツイデ歩イテイタ。極右新聞「フランスノ声」ヲ彼ラハ読ンデイタ。新聞ニハ「フランスノ若者ハ目覚メル」トイウ見出シガ出テイタ。ダガ、ソレハ本当ナノカ。フランスノ若者ハ今マデ眠リコンデイタノカ。ソウハ思エナイ。ナゼナラ若者ハ目覚メルタメニ如何ナ

ル挑発モ必要トシナイシ、若サトハ、快楽ニ敏感ナ状態、ツマリ生ニ目覚メテイル状態、ニ他ナラスカラダ。クロードモルネ・ロワイエモ、今ノフランスノ風潮ニ反感ヲ抱イテイル。当然ノコトダ。現在ノヨウナ重大ナ時期ニフランスガ理性ヲ失ッたら、国家ハ、精神的頽廃——死ノ舞踏——ニ向ウ以外ニドウスルコトモ出来マイ。僕ハ革命記念日ノ精神ヲコントレスカルプ広場ノ雰囲気ト森先生ノ書齋ニ感じタ。

(『パリの手記Ⅱ城そして象徴』河出書房新社、1971、7月14日。以下、特にことわりがない場合、引用はすべてこれをテキストとしている)

「僕ハ革命記念日ノ精神ヲコントレスカルプ広場ノ雰囲気ト森先生ノ書齋ニ感じタ」とあるが、いったいどんなことなのか。実はこの日の日記の冒頭に次のような書き出しで始まり、先に引用した部分につながっている。

イマクリストファト別レタトコロダ。今日ハ森先生ガ僕ヲ先生ノオ宅ヘ食事ニ招ンデ下サッタ。食事ノ後、五時間モ文明ヤ哲学ヤ先生ノ近著ニツイテ話シタ。僕ハフランス語ナノデ余リ積極的ニ話セナカッタ。気オクレガ邪魔ヲシタノダロウ。勿論話ノ内容ハヨクワカッタジ、面白カッタ。一時半ニ先生ノオ宅ヲ出タ。ソレカラ、ポルト・ディヴリカラポール・ロワイヤルマデ色々大事ナ問題ヲ喋リナガラ歩イタ。当然先生ノ近著ガ話題トナリ、ソレカラ主観ト客観ノ問題ヲ論ジタ。僕ハ、コノ十年来、真ノ客観的ナモノニ達シヨウト努メテイタタメ、白分ノ内部ノ事柄ガ、不確カナ主観性ト感じラレ、表現スルコトガ出来ナカッタコトヲ話シタ。今マデ、友人トコウシタ問題ヲ話ストキ、余リ十分ノ理解ヲ示サレタコトガナカッタ。シカ

* 教授

シクリストファハ素晴シイ理解ヲ示シタ。コノコトハ、チョット信ジラナイコトダツタノデ、僕ハヒドク嬉シカッタ。(同)

「森先生ノ書齋」での記述はごくわずかだが、その延長がクリストファとの会話であるとしてよいだろう。世界をどう見るかの話であって理性による思考作業である。そしてコントレスカルプ広場の記述については前々夜の7月12日の様子で雰囲気をくみ取っておきたい。夕食をすませてくるクリストファを待ち、クリストファからドイツ語を学ぶためにクリストファの常宿に行くのであるが、その近くに在る広場がコントレスカルプ広場である。

広場にゆくと、丁度まだみんなが飾りつけをしているところだった。まだ明るく、その暮れない夕闇のなかで、人々は提灯をつったり、三色旗を飾ったりギザギザに蛇腹のように折った紙を糸に通したのを、真ん中の木からはじの木へと張りわたしている。すべて青、白、赤の三色だ。まん中に、電線を巻く大きなロールが横になっておいてあり、これも三色で飾られた上に、張子のジャン・ダルクが三色旗を高くかざしている。紙やごみが散らかり、丁度、台にするテーブルを出したり、マイクロフォンをとりつけたりしているところだ。飾りつけをしている青年たちのほかは、キャフェのテラスに数人、買物帰りの主婦たちが立ちどまっているだけ。キャフェの奥から、パトロンがコップをふきふき飾りつけを見ている。キャフェのわきに、老人の、白い、よごれた髭の酔どれの乞食が、壁によりかかり、クリストファに指を二本あげて会釈する。クリストファのホテルの窓から、手製の三色旗を、若い青年が、窓のところに飾っているところだった。……(略)……

テーブルの上に若者がヴァイオリンを持ち、もう一人がギターをもっている。台の下にピアノが出してあるらしい。誰かがひいている。いっぱいの人のおうしろからのぞくが見えない。台の上に、丁度、マイクロフォンが、木と木の間に張った飾りの間から垂らしてある。「アン・ド・トロワ」といってマイクロフォンの試験をしている。木の枝にとりつけられたスピーカーから、声がわれて、聞える。ピーパー調節の音がする。キャフェのテラスはもちろん満員だ。広場には、赤い紙の帽子をかぶった人たちが、音楽のはじまるのをまっている。……(略)……

ここに集っているのは、大半はこのカルチエの住人のようだ。ベレーにチョッキだけの老人。背の曲った黒服の老婆。洗濯のしてない洋服に、肥った身体をつ

つんだ貧乏な主婦。背広をきた中年の男。背が低い、皺のよった老人が、眼を細めて、木の下に立って笑っている。爆竹の音が広場のあちらこちらでする。ワイシャツ姿の男が、細君と並んで立っている。どの顔にも、微笑が浮び、肩ごしに振りかえる女の顔も、笑いが浮んでいる。立って、喋り合っている女房たち。たばこをくわえて、なつかしうに人々を見ている老人。この間を子供たちは、胸をふくらませ、期待にわくわくして歩きまわっている。かたまて、楽団を見ている少女たち。町の青年が、十人ほど、ジャズを口ずさんだり、腰をふったり、拍手したりして気勢をあげている。その間にも人々は広場に二人、三人、四人と集ってくる。……(略)……音楽がはじまった。若者がヴァイオリンをたくみにひく。ギターがそれに合せ、ピアノが鳴る。……(略)……一組の男女が、もうくるくるまわりながらダンスをはじめている。人々がこみ合っている中で、その人たちとはまるで無関係に踊りはじめた。「マドモアゼル・ド・パリ」をはじめ。……(略)……あまい、パリ情緒をかなでる音楽をききながら、ふと、郷愁のようなものが胸をかすめる。キャフェの光は広場まではとどかない。キャフェの中はあかるい。広場のまん中にも明るく電燈が光り、張子のジャン・ダルクが三色旗を高々とかかげている。人々は黒いかげのように集り、笑い、陽気になり、人々の間をわけて二人で急いでゆくのもあり、喋り合っているのもあり、昂奮と快活さが、波のように、この焦りの中からたちのぼる。ジルバを踊る青年たち。短いスカートの若い女たち。髪が乱れ、熱くほてった顔に眼がきらきらしている。行きずりに見る老人、老婆、中年の婦人、若い人妻、会社員、職員、店の男たち。笑いかげ、気持がほぐれ、だんだんと活気がふくらんでくる。(7月12日)

辻邦生が日記に再現したコントレスカルプ広場の雰囲気は革命記念日当日の記述ではないが、その当日のお祭り気分を思い描くためには、上に引用した内容で充分であろう。革命記念日の前々夜にしてこのにぎわいである。辻邦生が目撃したそのにぎわいの様子を長めに引用したが、おそらくは当日のにぎわいはこれ以上であったに違いない。コントレスカルプ広場で目撃した庶民の生命力ある活力と理性が革命記念日の精神であるとしてよいだろう。

こうしたにぎわいが終るとパリは静かになる。ヴァカンスが始まるのだ。辻邦生はかくしてパリジャンパリっ子のごとく南仏へと旅立つ。

最初の訪問地は友人ルネ・ロワイエの故郷であ

るクレルモン・フェランだった。3日間の滞在のあと、7月23日にまる一日かかって、夜10時ごろポワチエの佐保子夫人のいる学生宿舎に着く。夫人と共に二泊三日のバス旅行でローヌ谷、ヌヴェール、プールジェをまわり、28日には一人でクレルモン・フェランにあるルネの実家に戻った。ルネの車で周辺をクロードと共に案内してもらったのち、8月1日の夜行列車でニースに向った。このニースでは、ドイツ人のペーターが合流しての共同生活が始まった。この生活が10日ほど続くとペーターはスイスに行き、佐保子夫人が8月14日から加わる。そして8月18日には、クロードと別れて、辻夫妻はイタリア旅行に出発する。その晩はピサで宿泊し、翌日の夕方にはローマに着いた。一日半のローマ滞在のあと、フィレンツェに向い21日の夕方に着く。翌22日の午後3時にはラヴェンナに向い、そこで二泊し、24日はボローニア経由でヴェニスに夜の8時に着く。そして一日滞在のあと、26日の早朝にヴェロナ、ブレンシア経由でミラノに夕方着いたが、予定を変えてその晩の夜行列車に乗り、27日の昼にはパリの自宅に戻った。ちょうど四十日間のパリ不在である。

8月27日の日記ではいつものように「パリ、カンパーニュ・ブルミエール街」という記述で始まっている。「1ヶ月半ぶりのパリ、そして僕らの部屋。午後の虚しい静かな日のなかで、ラフマニノフのピアノ協奏曲を聞いている。(午後1時半)」という記述がある。そして四十日間の旅の感概を次のように記す。

頭を洗い、ひげをそり、身体を洗って、机の前に坐っている。いくらか安心して、疲れて、地図をながめている。僕にしては、ほとんど予想もできなかった大きな旅行をしたことを、いま、地図のうえであらためて確かめてみる。パリも、この部屋の生活も忘れさせて、その日その日にあらわれる町々、風景、そして何よりも多くの教会やモザイクやフレスコの中に、身を投げかけて過ぎた四十日の後、再び、なぜか眩しいようなつかしきで、一本々々の糸をひろいあげるように、この「新しい」生活のなかへもどってゆく。ベッドがそのようにあったことが、ラジオがそのように音楽を放送していることが、窓からさす午後の日ざしがそのように明るいことが、机と本どもの並びがそのようにあったことが、四十日の間隔をおいた今、すべて、切断されたままに、その断面の新鮮さを眺めうる

状態にある。それは僕らのものでありながら、まだ僕らのものではない。時間が施した魔術が、このような日常のものごとを、まだ、目新しく、なじまず、孤立して僕らから離れているままに、置いている。その日常への移りゆきの僅かの時間——旅の興奮のなまなましく残っている今、書きのこした幾つかのメモを写しておこう。(8月27日)

こうして辻邦生はイタリア旅行のさまざまな印象と描写を旅行ノートから書き写し始める。このノートの整理作業は8月30日まで続く。この30日の日記では「多くの書きのこしたことはあるが、旅行のノートはすべてこのメモワールのなかへ読みうる字と文にして書込んでおいた。四十日の大旅行にしてはあまりにすくない文字の量」と記している。目にしたこと、印象に残ったことすべてを文字に定着させておこうという意志の現われであることは間違いない。

5-2 共同生活で

日本を離れてちょうど一年を迎えた日、つまり1958年9月4日の日記に次のような記述がある。それにこの日はパリに戻って九日目である。

リュクサンブールの花壇は、まだ僕らがパリをはなれた時のままの夏の花が、美しく咲きつづけているが、マロニエはすでに、日一日と葉を黄ばめてゆく。森の内よりも外側が、そして並木もよく見通せる側が、まず、黄ばみ、茶褐色の乾いた色になってゆく。近づいて枝々を見あげると、葉のふちから、黄褐色に色づき、乾いて、反りかえりはじめている。果樹園のそばでヘミングウェイを読んでみると、すでに、散りはじめている葉のあるのに気づく。緑の目のさめるような芝生の色は、冬も夏も変りがないが、この木々のあわただしく移りかわってゆく姿は、ヴァカンスがもうはるか遠くにすぎさった幻か何かのような感じを与える。昨年丁度九月四日の正午すぎに、横浜を出航したのだから、日本をはなれて、まる一年たったわけである。イタリアを旅して帰った今、ほとんどこうした年月には関心はなく、ただ人間のつくりあげたあまりにも多様な芸術の前に、目くらむ思いでいるだけである。過去よりは、未来が、今、僕をつかんではない。(9月4日)

イタリア旅行の興奮、あるいは感慨がもたらしているのだろうが、「未来が、今、僕をつかんで

はなさない」とするのはなぜだろう。辻邦生の記す旅行記を仔細に見てゆくなかで、それを明らかにしていきたい。

パリ不在の四十日は先の移動の行程からわかるように、なかほどの二週間はニースで友人たち、クロードとペーターらとの共同生活がある。その後、29日めに佐保子夫人と合流して、イタリアの旅に出かける。しかし、イタリア旅行の前に共同生活があったという事実を無視することはできない。この共同生活、そこでは辻邦生がペーターとのことで仲間はずれにされたような孤独感を強く感じた。しかし、それが「バカげた心情」と知り、「自己弁明や相手への憶測」が日本人の感情を支えていることを確信した。(長野大学紀要第18巻第4号掲載の拙論「辻邦生のパリ滞在(1)」を参照)

このことから、自分自身の問題へと思考を展開していく。したがって、この共同生活での辻邦生の日記に現れた思考作業を見ておきたい。

辻邦生自身が自らのうちに染みついている日本的感情をいかに払拭させるか。そのための思考が始まる。

僕がながいこと苦しめられた問題、そしてつい昨日、一昨日に現われた問題は、僕のある箇所に触れると、とつぜん僕が不安というか、おそれというか、そういうものにとりつかれることであった。自分ではふだん平衡を保っている、そんな不安に陥るはずはないと思っていたながら、突如として、ある動機から不安に陥るのだ。昨日は、それを自信の不足、自分の道への確信のなさに由来するものとして明らかにした。それは正しい。(8月6日)

このように自らを分析をしたうえで、「ある箇所」についても言及する。

自信のない箇所というより、それは自分にこだわること。架空の自分に安んじていること。自分でない自分を、見させられること。自分で知っていて、知らないふりをしているところを見させられること。それは自信のあるなしではない。もっと本質的な、弱い自己、自分の崇拜、自己の神秘化と理想化、自己の分裂に根ざしている。こうもいえる。自分では、自分を、ある理想的な歩みをしてゆくものだと思っている。それは確からしい。そうした確からしさが僕に平衡を与えている。ところが、そう信じていてもそれは自分による根拠づけであり、たぶん不確実さが入ってい

る。こうした不確実さ、自分の理想化した道の裏側を、不意に、「そら、これがお前の姿だぞ」といわれそうになるとき、突如、不安におそわれるのだ。

(同)

自分をいつわるつもりはないにしても、いつか他人による自分への過大評価を求め、自分も他人をそのようにすることでおもねる。これは多くの人間が、意識せずともしていることだ。過大評価を求めるために必要以上に虚勢を張る。嫌な言葉で言うならば「いい子ぶる」ということになるだろう。ところが「仲間外れにされる」とは評価されなかったこと、つまり自分の本当の姿、自分の欠点が見透かされたがために相手にされないことだ。辻邦生はこの思い込みをしてしまったのだ。だからペーターが疲れているから無口になり、話もしたくなかったと、聞いたとき一挙にその思い込みから解放された。そして自分の状態を明らかにする。

自信の回復、また相手の欠点の発見という治療策は、このような心的状態を根底から治癒するものではない。それはもっと前の問題にかえさねばならぬ。もっと前の——つまり、誰れかれの人物に会う前の僕、もっとつっこめば、僕が、僕に対する関係の基本にまで遡らねばならぬ。……(略)……自分のエゴをすてることによってしか、達することのできない何ものかであるのだ。自分から出ること——これはありのままの自分を見るということではない。ありのままの自分、それは自分にもわからないものだ。それより、自分に対するいかなる同情をもすてさるのだ。つまり自分の外へ出ることなのだ。(同)

このあと辻邦生は、自信とは「本来無意味なもの」と断定し、さらには「自分をどこかで満足させている匂いがつきまとう」ものであり、「自分を許す」ものだと書き記す。自分に眼を向け、自分を知り、自分を評価するがゆえに自信となる。単にこのような自信にこだわることでなく、これ乗り越えることを辻邦生は重要とする。

自分の外へ出ること——これはこのような領域をのりこえている。もしいかなる自信をも持てない男がいたとしたら、彼は救いのない人間だろう。他のことでのコンベンションしか期待できない。だから自分から出ること——大きな自分へ達するまで自分を出

て、行為すること、果すこと、後を向かないこと、傾倒すること。僕は「評価」というばかげた尺度をおそれない。もし自分の最善を果していないとすれば、そのことについては、僕は自らを罰すべきかも知れぬ。しかし、最善をつくしたという刻印をつけることによって、僕は次の仕事にかかるべきだ。勿論よりよくするためにそれを再びかえりみるのは、決して後を見ることではない。右顧左眊すること、評価を気にかけること、おそれること——つまり「自分」をつねに何ものかに関係づけること、これこそまさしく僕がいままでつねに犯した欠陥であったのだ。……(略)……いま、僕は、自分がひとりの人間、個という自明のものであって、それ自体はソリッドなものであり、そこから出るものだけが、しかも出すという行為だけが、もっとも人間に必要なものであることを知ることによって、過剰した自己評価から脱することができた。僕はむしろ多くの誤りをまだ犯すであろうが、この一つの事実の発見は、それをより少くするに違いないと思う。僕はだからペーターの欠陥をしいて見る必要もなく、さりとて何ものかの補償によって自信を回復する必要もなく、ただ、自分のベストをつくすべく、たえずする行為が残されているのだ。僕はこのニースの共同生活を、より最善にすすだらう。自分に対するいかなる感情的関与も拒むこと。そして自分の能力について評価せず、自分のなした力の果した具合を評価すること。そこから新しい僕の生活が始まるだろう。(同)

ありのままの自分の姿を提出し、評価を気にすることなく、行為(=小説を書くこと)をし続けることによってこれまでとは違う生活を可能としたわけだ。つまり新たな違う思いで満たされた生活が始まる。また、この生活は新たな人間関係を辻邦生に認識させる。8月9日の短い日記では次のように記している。

とも角ここにきてから、ある意味で本当に対等の友人という気持がペーターにもてる。というより、ペーターがはじめて、対等の、つまりぬ説教や親切や優越感のない気持で接する西欧人なのかも知れない。いままで僕の方から、へり下り、教えを求める態度にあるから、自然と対等というより、先生と弟子のような関係に変わる。しかしペーターはそんなことを許しはしないから、僕の中のこうしたバカげた態度が徹塵にくだかれた。(8月9日)

5-3 人間に視点をすえて

あらたな確信のもとでの生活が始まったからで

あろう。翌日の8月10日の日記では文章についての思索を日記で書き始めている。

やさしい、美しい響のいい言葉。みじかく、ひきしまっていて、物の形がはっきりと眼に思いうかべられるような文章。漢語はできるだけさける。しかし和文の、なよなよした、曖昧な、情緒で支えられているような文脈はさける。言葉でじかに何度繰り返しても、何度つみ重ねても、それは不十分だといわなければならない。ある考えを、最小限の言葉で、ある物、状況から、わかりやすく現われてくるようにする。ひたむきになって説得するのではなく、ひたむきに説得力のある文体なり文章なりをつくりあげるのだ。(8月10日)

このように目標をかかげて、文学に取り組んでいる限り「言葉の問題」に注意深くあらねばならないと、自らを戒めている。そして内容が言葉を決定するという考えにふれる。辻邦生はこの日記に具体例をひきながらその考えを確かなものにしていくので、その部分を次に引用しておく。

あるすじのもつ効果。その効果のために、また他の何によっても代えることができないために、そのすじは要るのである。／描写がもつ内容というものも同じく、その個々に結びついた実際の姿なり特徴なり風物なりが重要であるだけではなく、それらによって生れる、より詩的なものが重要なのである。「その秋は雪のくるのがおそかった。僕たちは山腹の松林のなかの木造の家にくらしした。……谷は深く、谷底には湖にそそいでいる川がながれている。風が谷の向うから吹いてくると、岩にせかれる流れの音をきくことができた。」前にひいたこの描写は、たとえば事実の報告とすれば、もっと簡単に書けるわけだし、抒情文とすれば、もっと別の形になる。ここでは、この形でなければならぬ必然的な内容がある。すなわち谷が深いという事実の報告で終わっているのではない。谷底に川が流れているというそれだけのことではない。そういう事実とともに、それらの全体の結びつきから生れる別のものの姿がある。それはちょっと説明しがたい。が、それがあつたために、描写が、単なる描写でなくなっている。ある風景の前でどんなに感動したところで、それを、目前の風物の描写から、生みだすことはできない。例えば僕のとっているメモのように、木々、家、岩などという風の、カメラのような平面的な、断片となった描写では、何も伝えることはできない。この場合、もはや風景は、何の役にも立たない。感動が、当面の問題であるからだ。しかしこの感動がその

風物から生まれているのは事実なのである。僕らはそこで、この感動を表現するために、風物を使う。したがって先行するのは感動であって一風物ではない。

(同)

何らかの事実を、言葉を並べての描写で再現したところで何の意味があろう。書く者の内に感動を呼び起こしたがゆえにその事実を書く。その事実をもってして感動を伝える。だから感動なくして書くことはできない。

と、ここまでは小説を書くための自らの思考を展開していた。小説は人間を描写し、表現することにはかならない。ところが「人間につかされた、人間のなかに現れるこのドラマをつかみとる激しさを持たねばならぬと思ひながら、なお人間をつつむ外界をも、すて切ることができない」と辻邦生は自らの弱点を書きつける。これを克服するためにはどうするか。

素材としての人間。人間の外貌、性格、言葉、会話、癖、偏執、考え、経歴。それらを現わしうる技術。こういうものの欠如が、僕の書く人間を、書物で読んだ、ありきたりの、すこしも血のかよってない、動きのない存在にしてしまうのだ。「個」ではなく、影でしかない。それは、地上に、一人の人間を加えることでなければならず、しかも断乎とした不滅の痕跡でなければならぬのに、紙できりぬいたような人間でしかない。ヒーローの創造というが、僕が書いてあくことのないそのような人間とめぐり会わなければ、それが不可能だということはない。それは、僕の好きな人間であり、僕が震撼する人間でありさえすればよい。何も模範をつくるのではないのだ。この人間から出てくるものを切りはなして小説は成りたない。「人間」こそ、僕が今から求めてゆくべき当の、そしておそらく最後の課題であろう。

(同)

そして強く決意する。

僕をかじかませている、この鞭をきろう。臆病に、おどおどと、半ば自分をかくし、かばおうとするこのヴェールをはごう。自分を投げうち、自分を鉄鎚の下におき、そこで人間をみよう。つねに自分よりも前に出て、自分を現実のなまの風にさらそう。大胆で、図太く、柔軟で、すべてをあたり前のことと考えよう。鞭をうけようと、面と向ってつばをはきかけられようと、痛罵されようと、(かつて広告とりに入ったときのいじけたような考え方はせず)これに立ち向かわね

ばならぬ。

(同)

この姿勢こそが、辻邦生にとって「自分をより高い自分にするための過程であり、時に、自分をまもる重要な手段ですらある」とみなして、さらなる決意のうちに高揚して強い調子で日記に書きつける。

どうして自分が存在し、それを維持し、それを高めるために、戦い、身をかまし、傷つき、立ちあがるのがいけないのか。大げさな、理想主義的な、シャボン匂いのする、学校の紋切型で、自分をしばりあげていて何になるのか。自分の枠を乗り切れ。不可能かもしれぬが、乗り切らねばならぬ。自分を弱々しくウソの外観をみせたり、こびたり、相手をあてにしてはならぬ。のりきるのだ、この引っこもうとする自分を、つきだすのだ。つきだしたそこでは、「個」としての戦いがある。しかしそれは「人間」の戦いだ。相手を待っていてはならぬ。それは相手をあてにすることだ。働くことがなげわいのだ？ 貧乏し、耐乏することが何故わるいのだ？ それは自明も自明、第一の定理だ。……(略)……かせがねばならぬ。食わねばならぬ。いろいろのものを見なければならぬ。いろいろのものを買わねばならぬ。快適な生活をしなければならぬ。冒険をしなければならぬ。当り前のことだ。そのために力をつくすことは、いいことなのだ。これこそが美徳である。

(同)

強い存在であるために自らを励まし、鼓舞している。下手に自己を隠すことなくあからさまにあるがままの姿を提出する。その上での人間関係を考える。つまり次のように辻邦生は調子を変えずに書き続ける。

主張し、戦わねばならぬ。相手も戦うであろう。それは戦う相手なのだ。だからこそ、真の人間であり、真の友情が生れるのだ。自分の書くものを、ひっこめてはならぬ。いかなる口実があってもひっこめてはならない。卑下したり、謙遜してはならない。それは出さねばならぬ。主張しなければならぬ。吐きだし、押し出し、自分の外へ出してしまわなければならぬ。それは自明のことだ。いかなる美学のカクレみのも許してはならない。それは口実だ。書くのだ。そして出すのだ。自分のすべてをそこにかけて、それを押し出し、押し出し、支えつらぬくのだ。……(略)……人間が人間としてみとめ合うとき、そこには戦いしかない。会社員は自分の地位と収入をまもるために、力をつくさねばならぬ。それを戦いとらねばならぬ。彼

は、相手と和睦し、こび、あてにすることによってでなく、戦いによって、それをかちとらねばならないのだ。全くの無関心、深淵が、人間と人間のあいだにある。……(略)……どんなところでも、人間として、対等であり、戦わねばならない。当り前のこととして、その人の前にいなければならない。おそれいたり、まごついたり、恐縮したりすることは、人間をけがすことだ。すくなくともばかげたことだ。……(略)……特殊な条件というのは全く滑稽だ。なにもない。対等だ。同じ地盤なのだ。こうして、相手を理解しうる。このような要求と戦いをもつ存在として相手を理解できるのだ。へり下ることは、相手にそれを要求し、つまりは人間でなくなることを要求することだ。教をこう場合も、このような自明なことの上にある。他から切りはなされ、それはそれで独立している。「個」は微動だにしない。(同)

そしてセールスに工夫するセールスマンと上役の関係の例にあげながら、明快に求めていたものを明らかにする。

自分(セールスマン)は自分で、その技術を使っている存在として、敵としてあるのだ。上役が肩を叩くだろう。彼が朝の気のきいた話をするだろう。しかしそれだけだ。余分なものは出ないし、侵入することもない。彼は考える。「多分彼は昨夜美人の事務員とウイスキーでものんだのだろう。」べたべたした関係は、上役対セールスマンの間にはない。肩をたたいた動作それだけが、この二人をつなぐ。その他は上役は上役、セールスマンはセールスマンの周辺をだけまわっている。これが僕のながいこと求めていた欧米の三文小説にすらでてくる人間関係のいわば端的な肉体化された感覚なのである。(同)

かくしてニースでの共同生活のなかから得たものが明らかになった。真の意味での人間関係である。

5-4 イタリアが与えたもの

さて辻夫妻のイタリア旅行である。訪れた場所は先にも記したが、ピサ、ローマ、フィレンツェ、ラヴェンナ、ポローニア、ヴェニス、ヴェロナ、ミラノなどだった。日記には携えていた小さな手帖に書き付けた印象やメモが転記されている。その主な内容は汽車の窓から見える風景、降り立った町の様子、訪れたカテドラルや教会、美術館の

展示品に関するものだ。

その手記の中でとりわけ詳しく書き込んであるのがフィレンツェのガレリア・デリ・ウフィッツ美術館である。メヂチ家によって、16世紀に建てられ、ルネッサンスの作品を中心に集められているのが特徴である。例えば次のように書き込んでいる。

高い暗褐色の美しい建物。細ながく続いて、奥を渡り廊下が結び、コの字形にガレリーをつくっている。第一室。彫刻だが開閉している。第二室。美しいつるつるの暗赤色の床。壁は白く、天井は高く、黒褐色の美しい木造で一段と天井が高くなって壁と天井の間から採光している。いままでみた美術館のうち最も美しく近代的で清潔で、すばらしく管理がいい。第二室で、ジョットーのマリアトチマブエのマリア、チマブエの十字架、作者不詳の十字架などを見る。

(8月23日)

これに続く記述も同じ調子で目についた作品の印象を丹念に記している。しかも第四十一室までの記述がある。もちろんすべての部屋ではないが、印象に残った部屋が中心である。特にこのフィレンツェは町全体が美術館であるとしてもよいほどである。

とにかく辻邦生は、この町のみならず、イタリアに圧倒されたのである。9月9日に書き記した日記には次のようにある。

イタリアから帰って、直後には何の反応も著しく見られなかったのが、いま頃になって、意外に強くそれが僕のなかに見出せるのが、不思議な位だ。その最も大きな変化は、芸術作品に対する態度の本質にまで及ぶ一種の精神的発展だ。僕のなかにあるふしぎに渴いたものが、僕を、作品へとかりたてる。と同時に、ブルジョアの秩序に対する徹底した嫌悪と反抗が強化される。今まで僕はブルジョアであることを、むしろ目ざしていた。よき市民であり、理性的であり、秩序を愛することを、自らに課していた。こうしたものへの嫌悪が、イタリアから帰ってあと、押えられない。同様に、あらゆる既成の権威、慣習の視野への反抗、蔑視、戦いが、僕のなかに目ざめてくる。「現実的なもの」の存在と半暗な真実の受容との間に立っている。

(9月9日)

「ブルジョアの秩序に対する徹底した嫌悪と反

抗」とは何か。これについては章をあらためて論じたい。

ともかくも、佐保子夫人とのイタリア旅行は終わった。

すでに秋だ。青空に実がながれ、マロニエは色づき、プラタナスもそろそろ色づきはじめた。葉うらに透る日の光の美しさ。しかしその透明であかるい光も、すでに秋の内省する静けさで流れている。冷たく、さわやかな空気。並木の梢をわたり、乾いて、冷

んやりと、白く吹きすぎる。

食事している間に、すっかり暮れて、空から急ぎ足に明るさが消えてしまう。暗い、冷んやりした宵闇に、街燈の青白い光。黒い木のかげがゆれている。「何んて早く暮れてしまうの？」とAが外を見ながらいう。「冷たい秋風が吹いてる。」空気が急にしんと澄み、肌がさらさらと冷たく、落葉が時おりゆれながら舞いながら街路に散ってゆく。

(以下次号)

(1998. 7. 2 受理)